

高松塚古墳壁画の検出とその報道

著者	米田 文孝
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	84
ページ	2-3
発行年	2022-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00026217

高松塚古墳壁画の検出とその報道

米田文孝

1934年（昭和9）、大阪府高槻市にある京都帝国大学地震観測所で地震計の増設工事中、夾紵棺を埋納した阿武山古墳の墓室が発見された。その報に接して現地へ急行された末永雅雄先生は墓室に上半身だけ潜り込まされ、「懐中電灯で見ると石室は小さく天井は低く、周囲には白壁をつけてある。一瞬私は愕然とした。これは朝鮮や満州の壁画古墳を連想したからである。しかし期待した壁画はなく（下略）」という記録を残された〔『日本の古墳』1961〕。

それから38年目の1972年（昭和47）、末永先生が所長（以下、肩書は当時）を務められていた奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）の手により、高松塚古墳の壁画が世に開かれた。後述するように、その成果が3月27日の全国紙朝刊の紙面に掲載されると、下降気味であった飛鳥ブームが再燃し、平日でも千里を遠しとせぬ人びとが全国各地から、高松塚古墳を一目見るために押しかけた。

その後、高松塚古墳は報告書や研究書のみならず、従来では想定外の媒体にもその成果が報道されるようになった。ここでは、高松塚古墳の壁画検出の公表直後から約半年間における新聞報道や雑誌、一般書などの活字媒体から、その社会的な拡散について勘案してみたい。

さて、1972年3月2日から開始された発掘調査の経緯は、当時2年次生で参加されていた森岡秀人氏による詳細な調査記録（通称森岡日誌）と、これをもとに執筆された『高松塚古墳』〔森岡秀人・網干善教1995〕に譲るが、壁画は3月21日（火）の12時30分ごろに確認された。25日（土）の午後には地域住民の方々を限定対象とした現地説明会が開催され、26日（日）の13時、阪合小学校で公式に記者発表が行われた。

翌27日の全国紙をはじめ各紙の朝刊一面には、高松塚古墳に関する記事が大きく掲載された。例えば、朝日新聞（大阪版）では1頁に「飛鳥に装飾古墳」、「法隆寺級の壁画」などの見出しと共に、西壁女子群像（通称飛鳥美人）と石槨全景の写真が掲載された。あわせて、末永先

生や田中琢氏（文化庁文化財調査官）、原田淑人氏（日本考古学会長）の談話が載せられた。

また、3頁には「法隆寺の壁画に匹敵するといわれる高松塚古墳の見事な壁画は、奈良県・飛鳥地方南西部の小さなハダカ山の下に眠っていた」にはじまる発掘の顛末が関係者のコメントを添えて紹介された。朝刊の記事を追うように、夕刊3頁には海獣葡萄鏡の写真と女子群像や月像・白虎、玄武、星宿図の模写が掲載された。見出しや写真などは多少異なるが、東京・西部・名古屋版でも同様に報道された。

3月29日（水）の朝刊（大阪・名古屋版）、30日の朝刊（西部版）には別刷（カラー特集）として、1頁大の西壁女子群像の原色印刷紙が挿まれた。裏面には東壁男子群像や青龍、玄武の白黒写真が刷られたが、日刊紙におけるカラー印刷紙面のはじまりであるとされる。他紙でも遅れて原色印刷が制作されたが、この経緯については別の資料に詳しい〔大八木成男1988『史窓余話』9、便利堂編2020『高松塚古墳壁画撮影物語』〕。『関大』第198号（4月15日号）では「高松塚古墳の壁画」と題した網干先生による調査概要と、発掘に従事した学生である石田修・中上京子両氏の参加記が紹介された。

さらに調査成果は国内のみならず、国外でも報じられた。例えば、網干先生の訪韓にあわせた『京郷新聞』（「古代日本文化 源流は韓国」7月19日）や『朝鮮日報』（「日飛鳥古墳 韓国影響明らか」7月20日）、『韓国日報』（「日飛鳥壁画 源流は韓国 高句麗より新羅・百済の影響を受けた」7月20日）などがある。

このように新聞報道は日増しに過熱していったが、発見直後の壁画を直近で観察したのは、最初に盗掘孔から上半身を入れた女子学生を除き、発掘現場を指揮されていた網干先生と伊達宗泰氏（橿考研所員）の研究者2人のみであった。情報の混乱を憂慮された末永先生は、担当者が正確な報告を行うのがよいという判断から、概要報告を伊達氏に指示されたという。

これを受けて、伊達氏は『朝日ジャーナル』4月14日号に「飛鳥・壁画古墳の発見」を執筆されたが、これが高松塚古墳発掘に関する文献資料の嚆矢となった。この報文では石槨の計測データはもとより、出土した海獣葡萄鏡の鈕に紐も残存していたという記述をはじめ、担当者ならではの内容であり興味が尽きない。伊達氏は、「ガラス器など異国調の金銀装身具を出土した新沢126号墳など（中略）一生に再度こない幸運とばかり感動した感激を経験しているが、今回はより以上その感動は強烈、衝撃的であった」と記されている。この時点で視点が朝鮮半島・中国からシルクロード・ユーラシア大陸に拡大していることも重要であろう。

同じく『週刊朝日』4月14日号では、表紙の女子群像写真に「カラー特報 よみがえった飛鳥の古墳壁画」の見出しが躍った。その巻頭には西壁女子群像の拡大写真や石槨の見開き写真、東壁女子群像の原色写真が掲載され、白黒写真で男子群像や青龍、玄武、調査風景などが続く。本文では「壁画古墳をめぐる5つの謎」と「天皇陵は掘れないのか」とする記事が展開されている。翌15日発行の『週刊新潮』でも、巻頭原色写真と特集記事が掲載された。『週刊朝日』は5月5日号においても、松本清張氏による「美人壁画ミステリーを解明する」で追っている。

学術誌では、『日本のなかの朝鮮文化』第14号（6月25日）が高松塚古墳の特集を組んだ。巻頭の有光教一氏による「高句麗時代の壁画墳」に関する論究をはじめ、「装飾古墳と古代の日朝関係」や「高麗尺と条里制」などが論じられる。座談会「高松塚古墳をめぐる」では、上田正昭・金達寿・司馬遼太郎ら5氏が、殯と仏教や壁画の個性、粉本の問題などについて、議論を交わされている。次いで『日本歴史』第293号（10月1日）が、義江彰夫氏による論文「高松塚古墳の壁画風俗と被葬者」と、井上光貞・岸俊男・斎藤忠



写真1 『週刊朝日』
4月14日号

氏ら6氏による座談会「高松塚古墳をめぐる」の記録を掲載する。

紙幅も尽きたので、媒体の種類別に時系列に沿って列挙しておこう。まず、写真誌ではB4判を生かした『アサヒグラフ』4月14日号が「よみがえった1300年前の群像」とし

て迫力に満ちた原色図版を特集している。「飛鳥の美人と貴人たち」としてB4判で臨時増刊号を刊行した『週刊読売』5月5日号も同様である。



写真4 『週刊読売』
5月5日
臨時増刊号

月刊誌では、6月1日に『歴史と人物』6月号で「高松塚古墳の源流を探る」や『婦人之友』第6号で座談会「明日香に語る-高松塚古墳をめぐる-」、『科学朝日』第6号で「東南アジア全域の研究課題-高松塚古墳を発掘調査して-」、『文芸春秋』6月特別号で「天皇の墓を掘って何になる」が刊行された。次いで『歴史読本』8月特別号（7月10日）で「高松塚古墳と渡来文化」や『産業と文化』第1号（8月31日）で対談「大らかな古代人の風俗」の特集や記事が組まれた。また、『太陽』10月号（9月12日）では「聖徳太子の謎」と関連して、西壁女子群像の原色図版が掲載されている。

美術誌では5月1日に『芸術新潮』5月号で「飛鳥壁画の画家」、6月1日に『芸術生活』6月号で「高松塚と装飾古墳」、『日本美術工芸』第405号で「高松塚古墳の謎」、6月30日に『古美術』37で「高松塚古墳壁画」、8月1日に『仏教芸術』87号で「高松塚古墳特集」、8月1日に『三彩』291号で「随筆 高松塚古墳が発掘されて」の特集や記事がある。

また、単行本では『壁画古墳の謎』（6月24日）や『朝日シンポジウム高松塚古墳』（6月25日）、『飛鳥高松塚古墳』（7月10日）、『シンポジウム高松塚壁画古墳』（7月10日）、『飛鳥の謎』（8月10日）、『高松塚古墳と飛鳥』（9月15日）と、矢継ぎ早に刊行された。

このように、歴史・美術系月刊誌や単行本のみならず、従来にはなかった婦人誌や総合誌にまで特集されるという、ある種の社会的現象が生じた。

10月25日、壁画検出から約半年という短期間で『壁画古墳高松塚 調査中間報告』（樞考研・明日香村）が刊行される。これ以降は石槨の解体修理にともなう発掘調査成果報告が刊行された2017年まで、本書が実測図や数値データなどの基本となった。その後、研究成果の公表はもとより、壁画検出から10年、20年と、節目の年次には講演会や展示会などが開かれてきたが、2022年の今年その50周年を迎えた。